

新進地産新聞

「分離をおして共同体へ」

「アナーキーは、将来のことではなく現在のことであり、要求の問題ではなく生活の問題である。これは、過去に獲得した物質の国有化の問題ではなく、新しいフォルク（民衆）の問題である。新しいフォルクは、国内移住により、他のフォルクのたぐいの中にあって、小規模な開始から新しい共同体にまで自己を形成する。結局、それは、所有者に対する無所有者の階級闘争の事柄ではなく、大衆からものを引離した、自由で内面的に力強い自律的な人々を、新しい構成体に結合することである。」

（ランタウアー）

われらの運動を取り戻すために	---	1
塾共同体・こむうな塾へ向けて	---	5.
わが常民・民俗・歳時の記	---	8.
弥栄村・一般会計予算	---	10.
教科書批判（その1）	---	12.
むらと子供の日	---	13.
共同体直販体験記	---	15.
コムユン・セロバ	---	17.

49. 7. 14.

19

NO.

発行

大阪市東成区土津二丁目東成土津郵便局番 コミュニ百人委員会 (振替・大阪94664)

われの運動を取り戻すために —星火燎原のコミュニオンへ向けて—

まず、去年の夏キャンソフのち郵
宋に常駐した私の視点で、今までの
弥栄の運動とキャンソフを整理するこ
とから始めた
い。

最初、私は
キャンソフに参
加して、その
時点で弥栄が
やっていた運
動に触れた。
そしてある程
度理解し共鳴
する部分があ
ったからこそ
いれゆる常駐

という形で運動に加わった。

常駐という原点で

そこでもまず私がなすべき作業は、

その常駐という行為を、自分のへ生
Vの中にどう位置づけ、単に理解・
共鳴の次元にとどめることなく、こ
まで自分の生き方、自分の運動と
してとりこめるかを追求すること
であった。しかしそれはすでに動き出
していた運動である。たとえば「四
つの闘争方針」が出され、広島に「
直販センター」ができ、弥栄では「
共同耕作」が始まり……といった真
合に、容赦なく状況は変化していく。

その中で、この出発点でわこなう
べき私の作業は、たとえば「今晚中
にやらんとあかんがり切り」や「明
日こなさんとあかん直販」に流され
私だけのやらねばならない作業があ
ったはずなのに、その作業まで含み
込んだ形で日常を送ることができな
かった。そんな意味で、徹底的にへ

個体化しきれないわれだけ運動
から取り残されていった。

キャンソフをやるうとする時でもつ
である。それは、その時点でのへ運
動の必要Vという次元から発想さ
れ、他の誰でもないわれの必要V
としてキャンソフをやることの意味を
自分なりにつきつめて取りくむこと
ができなかった。

つまりそこで自分がやってきた作
業は、われの個体化Vではなく、
逆に今あるレベルの弥栄の運動へと
自己を同化することへのみ熱心にな
り、その結果自うを拘束し固定化す
る行為でしかなかった。そうなるこ
もう、その個人にとっても、またそ
んな個人の寄り集まりでしかない集
団にとっても、運動はそれ以上に進
展しない。

蘇生する雨

それを依然、「前進を志向する運動」である彌栄が現実としてかかえる状況は存じし、肥大化し、その結果状況をかききれなくなった個人や集団が運動から疎外されていく。

時に、その状況が眞の方向へとからまわりしした時、運動はそのジレンマを脱しきれないばかりか、上昇をめざしつつ、下降していく。

そんな危機を直視し、それを突破するために、そして次の一步を踏み出すために、自分なりに運動を取り戻すことをしたい。それは、すなわちもう一度彌栄の運動に血肉を付け加えるところから始めることになる。

そこで、**ハハの個体化への作業**、彌栄の運動を自らのものとしてへ内化し、さらにハ外化へする作業を

いくつもの方向でやり始めたい。

①自分が何故「共同体」を志向するのかの原点に立ちかえり、その原点そのものをも、もう一度疑ってかかること。へ初心にかえり、初心をもう一度疑うこと。

②自分の欲求からくる運動そのものへと、自分の全体性、持ち味を出しきったところでの運動へと、彌栄の運動を模索していくこと。

③メンバーそれぞれが、具体的な一つの自分の試みを、共闘の中に築き、その自分の試みを通して、次の段階をさぐる。

今回のキャンプは

キャンプをとってみても問題点は同じところにあった。へわれを個体化しきれないまの個と個であれば、キャンプの中で創造する「共同労働

しや」「共同生活」が、どれほどの変革力も持ちえないことは明らかである。

そこで今回の夏キャンプを、彌栄は、彌栄を構成するひとりひとりはまず徹底的に自己を問い返す場として、また自らの運動を組んだて直

す場として、自らとメンバーに向けて提起する。すなわちへわれの個体化へ、へわれの変革への作業性

他者との関係行為の中でしかなしえないことを確認することによって、キャンプでの「共同労働」や「共同

生活」をより高いもの、単なる手段としてでなく用いるコミュニケーションの必須要素へと転化していこうと思つ。

彌栄がつきつけるもの

次に、一個のメンバーの立場へと視点をもつてみよう。彼にとつ

てこれまでのキャンフは何だったの
だろう。

キャンフは本来、限定された特殊
な条件の下での集団である。その集
団の構成員である彼は、キャンフと

いう空間にあっては直接に外からの
抑圧に触れることもなく、生活に追
いまくられるわけでもない。その彼

がキャンフを追求しうる労働は、真
に自発・自治・自律による労働、欲
求そのものとしての労働であつたは

ずである。またその生活面において

は、何ものにも拘束されない自由な
発想・感覚をもって、自らの小市民
的日常生活を検証しうるはずであつた。

なぜなら彼は、キャンパーであ
る彼が送ってきた日常やしてきた労
働に対し、それを否定しうる現実の
存在として、つきつける向かを持つ

ているからである。

たとえばそこには、

へ生活——それそのものが用い
てあり生きることにつながる。そんな
生活がある。

へ労働——何ものにも換算しえな
い創造行為としての生産労働・肉体
労働がある。

へ集団——緊張した人間関係を通
して、そんな労働や生活を追求しよ
うとする集団がある。

さらに、へ人間——生活者・労働
者・生産者として現代社会のみずみ
にじかにさらされつつある農民の
顔がある。

そして何よりも、へムラ——虚構
としての現代社会を底の底から否定
しうる可能性を秘めたほんものの社
会ムラがある。そこでは、生身

の人間がうごめいている。

しかし、そんなつきつけにもかか
わらず、現実にはキャンパーは旅
の運動の見学者であり、旅人であ
りなかつた。

たとえばキャンフでの対話や人間
関係がいつまでも都会でもっていた
と同じ意識や内容でだらだら続けら
れたり、毎日の労働や生活が全くノ
ルマ的にしかこなされなかつた。そ
してキャンフを離れて自分の生活空
間に戻ると、結局また元のままの日
常に埋没してしまつたのである。

その理由として、ひとつにはキャ
ンパーがこれまでの自分の労働や生
活を既成の価値観でしか向い返せな
かつたことがあげられる。また労働
や生活が緊張した人間関係の中でこ
そ練りあげられ、欲求そのものとし

ておこなえるのだということ。彼
は自分のものにできなかつたのであ
る。

そうではなくて、メンバー、可
のにもとらわれない燃焼するひとつ
の個性として自己を取り戻し、まず
その精神構造を変革する場としてキ
ャンプを創造しえていたなら、そん
な彼が目にする弥栄の運動も、彼に
とって全く違ったものとしてうつ
たであろう。また、相互に変革しあ
うものとして自己と弥栄をとらえた
にちがいない。

『星火燎原のコミュニン』

夏のキャンプは少なくともそんな
ところから始めたい。そこで出発す
るキャンパーと弥栄との関係は、こ
れまでのキャンプでありがちだった
「個別弥栄」とうかがわれるか、式の

状の視点を越えたものとして、次の
段階の運動を形づくるだろう。

そこでは、個別弥栄の問題、弥栄
の運動に基き、出発点として内化し、
さらにそれをより普遍的な運動
へとへ升化させる作業がなされねば
ならない。

キャンプ中の現実にかえっていえ
ば、弥栄の個々の活動——直販、人
民工作、ガマの穂へ部落向け新聞の
発行等——を、自分の運動として、
あるいは自分の内へ向けて弥栄をと
りこむ作業として、自発的におこな
おうとするキャンパーには、どんな
ん常駐者と動きを共にしてもらおう
と考えている。さらには、新しい動
きを創出していってもらいたい。

ただし弥栄の活動になう前に、
やはり彼は自分にとってのその行為

の意味・目的を明らかにし、具体的
な獲得目標をもつてのぞんでほしい
と思う。

そしてそんな出会いによって生ま
れた火花は、やがて四方へ飛び散り、
さまざまの場において、それぞれの
依拠する空間に深く根ざしたところ
で、ほのおとして燃えあがるにちが
いなし。今弥栄は、そんな意味で「
星火燎原のコミュニン」へ向けて、
自らの火花をも飛び散らす方向へと
進んでいる。われわれの共同体運動
が、ワークキャンプ運動を一つの起
点とし、その限界性を自己否定する
ところから始まった運動であるから
こそ、われわれのひらくキャンプは
かつての現実を止揚するものになけ
ればならない。